

# 意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞

浅尾 仁彦

## 1 はじめに

本稿では、「叩き割る」「泣き叫ぶ」のような日本語の語彙的複合動詞<sup>1</sup>において、どのような動詞の組み合わせであれば複合動詞の形成が可能なのか、および、複合動詞が形成された場合どのような項構造を持つのかについて、語彙概念構造 (lexical conceptual structure, LCS) の「重ね合わせ」という操作によって説明することを試みる。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、従来の複合動詞の LCS の記述およびその問題点を指摘する。3 節で本稿の議論の土台となる理論的枠組みについて述べたあと、4 節で LCS の重ね合わせ規則を提案し、この規則から予測される現象について述べる。5 節ではさらに論を進めて、重ね合わせ規則と、従来から提案されている他の制約とを組み合わせることで、複合動詞の形成が可能な組み合わせについて正しく予測することができることを示す。6 節でまとめを行う。

## 2 問題の背景と先行研究

LCS の考え方では、動詞の意味は抽象的な述語に分解され、一定のスキーマに従って表示される。本稿では、影山 (1999) などに従い、LCS を次の枠組みによって表現する<sup>2</sup>。

(1) [x ACT(-ON y)] CAUSE [BECOME [z BE-AT w]]

上位事象

下位事象

---

<sup>1</sup> 影山 (1993) などに従い、統語的複合動詞 (「食べ始める」「増えすぎる」など) と語彙的複合動詞とを区別する。統語的複合動詞は動詞句の埋め込み構造をもち、本稿で扱う意味的性質には従わないと考えられるため、今回は扱わない。なお、本稿を通じて前項動詞を V1、後項動詞を V2 と呼ぶ。

<sup>2</sup> 通常、(1) の枠組みにおいて y と z の指示対象は同一であるが、ここでは必ずしも両者の同一性は義務的ではないと考える。y と z の指示対象の一致が好まれることは、対象一致の制約 (5.3 節) という追加の制約の形で述べる。

ここでは、動詞の意味は、能動的な働きかけ(上位事象)と、それによって引き起こされる受動的な変化(下位事象)との組み合わせか、その一部から成るということが表現されている。これはより一般的には、行為連鎖(action chain)(Langacker 1991)などと呼ばれる、人間の普遍的な事態把握のあり方を形式的に表現したものといえる(影山 1993: 46)。

例えば「(xがyを)割る」は、xの働きかけによって、yが割れているという結果状態への変化が起こることを表すと解釈することができ、そのLCSは次のように与えられる。

(2) 割る : [x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BE *BROKEN*]]

影山(1999: 215)が論じるように、(1)の枠組みが意味するのは、単一の語彙がもつことのできる意味に一定の限界があるということである。単純動詞であるか複合動詞であるかを問わず、単一の語彙のなかに(1)の枠組みを超える意味を詰め込むことはできない。例えば、ある動作や出来事を理由として能動的な動作を行うような意味をもつ複合動詞は成立しない。

- (3) a. \*彼はどこかに驚き逃げてしまった。  
b. \*彼女は財布をなくし探した。

同様に、能動的でない出来事が他の何かに対して変化を引き起こすような複合動詞も成立しない。

- (4) a. \*大地震がビルを起こり倒した。  
b. \*崖が民家を崩れ壊した。 (影山 1999: 215)

これらの例は、複数の動詞句を用いれば容易に表現できる内容である(「彼は驚いてどこかに逃げてしまった」、「崖が崩れて民家を壊した」)。これは、語彙的複合動詞も、(1)に表現された「能動的な動作とそれによって引き起こされる受動的な変化の組み合わせ」という範囲を超えるものは表現できないという制約をもつことを示唆している。

しかしながら、先行研究では複合動詞に対して必ずしも(1)の枠組みに従った表示が与えられていない。例えば、影山(1993: 116)は「切り倒す」のLCSとして次のような構造が妥当であるとしている。

(5) 切り倒す : x CAUSE [y FALL] by x CUTTING y

また、由本(1996)、影山・由本(1997)では、複合動詞をV1とV2の意味的關係に基づいて次の5種類に分類し、それぞれについてLCSによる表示を与えている。ここで

LCS1, LCS2 はそれぞれ V1, V2 の LCS である。

- (6) a. 並列関係 (「恋い慕う」) : LCS1 AND LCS2
- b. 付帯状況 (「すすり泣く」) : LCS2 WHILE LCS1
- c. 手段・様態 (「切り倒す」) : LCS2 BY LCS1
- d. 因果関係 (「おぼれ死ぬ」) : LCS2 FROM LCS1
- e. 補文関係 (「見逃す」) : [LCS2 ... [LCS1] ...]

ここでもやはり複合動詞の LCS は, WHILE や BY など追加の述語を導入し, (1) の枠組みを拡張することで表現されている。

由本 (2005) は, 動詞に普遍的な意味的制約があることを指摘したうえで, (6) のような複合的な LCS が, 単一の事象を表す LCS に「再分析」されるとしている。例えば, 「泣き叫ぶ」は (7) のように, また「蹴り上げる」は (8) のように再分析されるとする。

(7) 泣き叫ぶ :

$$[[x_i] \text{ CONTROL } [[y_j] \text{ CRY}]] \text{ AND } [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_i] \text{ SHOUT}]] \Rightarrow \\ [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_j] \text{ CRY AND SHOUT}]]$$

(由本 2005: 113)

(8) 蹴り上げる :

$$\left( \begin{array}{l} [x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[y_j] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]] \end{array} \right) \Rightarrow \\ [[x_i] \text{ CONTROL } [[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]] \text{ CAUSE } \\ [\text{BECOME } [[y_j] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]]]$$

(由本 2005: 124)

ただし, 由本は限られた例についてしか再分析の起こり方を示しておらず, どのような再分析の操作が可能か, また, そもそもどのような場合に LCS が「単一の事象」を表現していると言えるのかについては明示していない。

本稿では異なったアプローチをとる。即ち, 複合動詞においても (1) の枠組みに従った LCS のみが許されるということを前提とし, その LCS は, 元になる二つの動詞の LCS を「重ね合わせる」ことによって得られると考える。このように LCS の記述に強い制約を課すことで, どのような組み合わせの場合に複合動詞が形成可能か, またその結果生じる複合動詞がどのような性質をもつかについて, 予測力をもたせることができる。

### 3 理論的前提

本節では、本稿の理論的前提として、LCS とその統語的実現とを結びつける対応規則、および LCS に基づいた動詞分類を導入する。

#### 3.1 LCS と項構造

本稿では、動詞がもつ項構造は、(1) に示した LCS の枠組みから、対応規則に基づいて自動的に与えられると考える。ここでは、影山 (1996: 92)、伊藤・杉岡 (2002: 25) などに従い、表 1 のような対応規則を想定する。

項構造	語彙概念構造
外項	ACT-ON の主語項 ( $x$ )
直接内項	BE-AT の主語項 ( $z$ ) 下位事象をもたない場合は ACT-ON の目的語項 ( $y$ )
間接内項	BE-AT の目的語項 ( $w$ )

表 1 対応規則

他動詞では、外項は主語、直接内項は直接目的語、間接内項は(もしあれば)間接目的語として実現される。自動詞は、外項をもち直接内項をもたない非能格自動詞と、直接内項をもち外項をもたない非対格自動詞とに二分される。非能格自動詞では外項が主語として、非対格自動詞では直接内項が主語として現れる。

以上の仕組みを通じて、動詞の LCS からその統語的実現が予測されることになる。

#### 3.2 動詞分類

本節では、(1) で示した LCS の枠組みに基づいて、以下の議論の前提となる動詞分類を示す<sup>3</sup>。

まず、他動詞は、上位事象のみをもつ働きかけ動詞と、上位事象と下位事象の双方

<sup>3</sup> ここで示した動詞分類はごく簡略なものであり、全ての動詞を満足に記述できるものとはいえない。例えば、(1) の枠組みでは、「流れる、揺れる」など非限界的 (atelic) な非対格自動詞は表示できない (影山 (2002) が示すように、下位事象に関しては [BECOME [ $y$  BE-AT  $z$ ]] の代わりに非限界的な内容を記述できるオプションの存在を認めるのが適切であろう)。しかしながら、今回はごく基本的なタイプの動詞に議論を絞ることにする。より網羅的な議論は今後の課題となる。

をもつ使役変化動詞に分類することができる。

(9) 働きかけ動詞 (叩く, 押す, 突く, 嘯む, 打つ, 洗う, etc.)

叩く : [x *BEAT* y]

(10) 使役変化動詞 (割る, 潰す, 刺す, 切る, 消す, 落とす, etc.)

割る : [x *ACT*] *CAUSE* [*BECOME* [y *BE BROKEN*]]

一方, 非対格自動詞, 非能格自動詞に対しては, それぞれ次のような LCS が対応する。非対格自動詞は, 使役変化他動詞と基本的に同一の LCS を持つが, 外項を表出することができない性質 (この性質は 由本 (2001) では素性 [-acc] によって表現されている) をもつと考える。

(11) 非対格自動詞 (割れる, 潰れる, 刺さる, 切れる, 消える, 落ちる, etc.)

割れる : ([x *ACT*] *CAUSE*) [*BECOME* [y *BE BROKEN*]]

(12) 非能格自動詞 (笑う, 働く, 寝る, 遊ぶ, 泳ぐ, 走る, etc.)

笑う : [x *LAUGH*]

一部の非能格自動詞には再帰的な LCS が対応し, これらは下位事象をもつ。例えば, 「行く」という語は, 動作主の能動的な行為の結果, 動作主自身の位置が変化することを意味しており, 次のような再帰的な LCS をもつと考えることができる。

(13) (再帰的) 非能格自動詞

行く : [x *ACT*] *CAUSE* [*BECOME* [x *BE-AT* y]]

このような動詞では, 外項と同一指示的な内項は表出されない。

## 4 LCS の重ね合わせ

本節で, 複合動詞の形成の際にはたらく LCS の重ね合わせ規則を導入し, この規則から直接説明される現象について論じる。さらに, 重ね合わせ規則がうまく適用できないケースについて述べる。

### 4.1 重ね合わせ規則

複合動詞が V1 と V2 が指し示す二つの事象の両方が生起したことを意味するとすれば, V1, V2 それぞれの LCS の内容がともに複合動詞の LCS に引き継がれるはず

である<sup>4</sup>。さらに、単純動詞と複合動詞がどちらも (1) の枠組みに従うとすれば、単純動詞の LCS 内のある位置に書かれた記述は、複合動詞の LCS の対応する位置にそのまま引き継がれるはずである。例えば、V1 が ACT に関してその様態を指定しているとすれば、複合動詞全体もそうであるはずである。

以上を考慮に入れると、LCS の重ね合わせ規則として次のようなものを想定することができる。

#### (14) LCS の重ね合わせ規則

LCS の枠組み (1) において、

- ある節点を V1 か V2 の片方だけがもつ場合、その内容はそのまま複合動詞の節に引き継がれる。
- ある節点を V1 と V2 の両方がもつ場合
  - 述語の位置では、両者を *and* によって接続したものが複合動詞の相当する節に代入される。
  - 変項の位置では、両者に同一の指示対象を割り当てることができる場合のみ、それと同じ指示対象が割り当てられる変項をその節に代入できる。両者に同一の指示対象を割り当てることができない場合は、複合動詞を形成することができない。

これがどのように働くかを見るため、単純な例として「泣き叫ぶ」という語を考える。V1, V2 はともに非能格自動詞であり、それぞれ LCS は次のように与えられる。

(15) a. 泣く : [ $x$  *WEEP*]

b. 叫ぶ : [ $y$  *CRY*]

$x$  と  $y$  には同一の指示対象を割り当てることができる。このことを、次のように添字によって表現する。

(16) a. 泣く : [ $x_i$  *WEEP*]

b. 叫ぶ : [ $y_i$  *CRY*]

ここで「泣き叫ぶ」の LCS を考える。ACT 位置にはそれぞれ *WEEP*, *CRY* という述語が代入されているので、これらを *and* で接続したものが「泣き叫ぶ」の ACT 位置に代入される。また、 $x$  と  $y$  の添字が一致しているので、複合動詞に、これらと同じ指示対象をもつ変項を与えることができる (このことは、「泣き叫ぶ」の動作主が「泣く」

---

<sup>4</sup> むろん、語彙的複合動詞にはこのような意味の構成性を失った語が多く存在する。従って、本稿の議論の射程は、意味の構成性が十分保たれた語に限られることになる。

の動作主、「叫ぶ」の動作主の双方と一致することを意味している)。従って、(17)が求める LCS である。

(17) 泣き叫ぶ：[ $x$  *WEEP and CRY*]

同様に「叩き割る」という語を考える。V1 と V2 の動作主は共通であり、また対象も共通であるから、次のように添字を与えることができる。

(18) a. 叩く：[ $x_i$  *BEAT*  $y_j$ ]

b. 割る：[ $z_i$  *ACT*] CAUSE [*BECOME* [ $w_j$  *BE BROKEN*]]

この LCS から、LCS 重ね合わせ規則に基づいて、「叩き割る」の LCS が次のように導かれる。

(19) 叩き割る：[ $x$  *BEAT*  $y$ ] CAUSE [*BECOME* [ $y$  *BE BROKEN*]]

また、「ドアを開けて、部屋に入る」の意味で複合動詞「\*開け入る」を用いて「\*彼は部屋にドアを開け入った」のように表現することはできない。これは、LCS 合成規則によって導かれる。「開ける」(使役変化動詞)、「入る」(再帰的な非能格自動詞)はそれぞれ次のような LCS を持つ。BE-AT の主語位置は、「開ける」では「ドア」であり、「入る」では「彼」である。両者の指示対象は一致しないため、合成規則から、複合動詞を形成することができないことが予測される。

(20) a. 開ける：[ $x_i$  *ACT*] CAUSE [*BECOME* [ $y$  *BE OPEN*]]

b. 入る：[ $z_i$  *ACT*] CAUSE [*BECOME* [ $z_i$  *BE-IN*  $w$ ]]

次節以降で、その特殊なふるまいが重ね合わせ規則から直接予測される複合動詞のグループとして、「洗い落とす」類と「飲みつぶれる」類の2つを取り上げる。

#### 4.2 「洗い落とす」類

「洗い落とす」「振り混ぜる」「掘り起こす」などの複合動詞は、V1 と V2 の動作の対象が一致しないという性質をもつ。このとき、複合動詞は V2 の取る項に従う。

(21) a. 服を洗う

b. 汚れを落とす

c. { 汚れ / \*服 } を洗い落とす

この現象は重ね合わせ規則によって説明することができる。「洗う」「落とす」の LCS をそれぞれ次のように考える。

- (22) a. 洗う : [ $x_i$  WASH  $y$ ]  
 b. 落とす : [ $z_i$  ACT] CAUSE [BECOME [ $w$  BE OFF]]

「洗う」と「落とす」の対象は一致しないため、(18)の場合と異なり、 $y$ と $w$ に同一の添字を与えることができない。その結果、得られる複合動詞のLCSは次のようになる。

- (23) 洗い落とす : [ $x$  WASH  $y$ ] CAUSE [BECOME [ $w$  BE OFF]]

表1の対応規則では、BEの主語位置が優先的に内項として現れることが規定されているので、「洗い落とす」の目的語として現れるのは $y$ (服)ではなく、 $w$ (汚れ)であることがわかる。

「洗い落とす」類においてV2の項が優先されることは、影山(1993: 104)では、V2が主要部であることに基づいて説明されている。しかし、本稿の議論では主要部の概念は用いていない。

このことは他言語との対照において有利である。中国語の複合動詞では、どちらが主要部であるかについて一致した見解は得られていない(鈴木2004: 309)。また、英語では、相当する内容は結果構文によって表現される。どちらの言語でも、目的語の位置には結果状態の描写された対象が優先的に現れ、本来の「洗う」の目的語は現れることができない。従って、主要部の設定の問題に関わりなく、ここで示したLCSによる説明は他言語に対しても有効である。

- (24) a. 我 洗掉 了 {污垢/\*衣服}。  
           1sg 洗い落とす ASP 汚れ 服  
 b. I washed { dirt / \*clothes } off.

#### 4.3 「飲みつぶれる」類

「飲みつぶれる」「聞き惚れる」「待ちくたびれる」など、V1の動作の結果、動作主自身がV2の変化をこうむるような動詞が少数ながら存在する(由本2001: 462)。「洗い落とす」類と同じく、これらの複合動詞においてもV1の目的語は表出されにくい。

- (25) a. ?\*ワインを飲みつぶれる  
 b. 彼の話 { \*を / に } 聞き惚れる  
 c. ?\*彼を待ちくたびれる



この現象も、LCSの重ね合わせ規則から説明することができる。「飲む」「つぶれる」のLCSは次のように与えられる<sup>5</sup>。

- (26) a. 飲む : [ $x_i$  DRINK  $y$ ]  
b. つぶれる : ([ $z_i$  ACT] CAUSE) [BECOME [ $w_i$  BE DRUNKEN]]

「飲みつぶれる」の重ね合わせは次のようになる。

- (27) 飲みつぶれる : [ $x$  DRINK  $y$ ] CAUSE [BECOME [ $x$  BE DRUNKEN]]

従って内項には  $x$  が割り当てられ、 $y$  (ワイン) が項として現れることができないことが正しく予測される。

しかしながら、「\*服を洗い落とす」のような例と比較すると、(25)の例は完全に悪いわけではなく、話者によっては容認されるものもあるようである。また、(28a)のように、中国語の相当する表現においても、随意的に目的語の表示が可能であるという指摘もある(鈴木 2004: 310)<sup>6</sup>。「洗い落とす」類と異なり、ヲ格が別の要素によって占められることがなく、空いたままになることが、これらの表現を許容しやすくしている可能性がある。

なお、中国語はこのほかにも対格を表示する「把-」という形式をもつが、秋山(1998: 36)によれば、この形式は「喝酔」のような複合動詞と併用することができない(28b)。また、英語では、「飲みつぶれる」のような複合動詞には(28c)のような再帰代名詞を用いた結果構文が相当する。従って、英語では(24b)と同様の形で、動詞の本来の目的語を表示することができなくなっている。

- (28) a. 他 喝醉 了 (酒)。  
3sg 飲んで酔う ASP 酒  
b. \*他 把 酒 喝醉 了。  
3sg ACC 酒 飲んで酔う ASP  
c. He drank { himself / \*alcohol } sick.

<sup>5</sup> 「つぶれる」にあらかじめ DRUNKEN の意味表示を与えることには異論があるかもしれない。実際には「つぶれる」の意味はもっと広く、DRUNKEN の意味が確定するのは「飲み-」が前置されるという環境のためであるが、ここではそのメカニズムについては省略する。

<sup>6</sup> 鈴木はこれを疑似他動詞用法と呼び、中国語では「項の統語位置と意味役割の間に厳格な対応関係が見られない」としている。

#### 4.4 重ね合わせ規則の適用できない複合動詞

本節では重ね合わせ規則で直接扱うことのできない複合動詞について取り上げる。

まず、従来、補文関係をもつと分析されてきた複合動詞は、重ね合わせ規則で扱うことができない。たとえば「ほほえみ返す」という複合動詞について考えてみると、「返す」が取るヲ格を「ほほえみ返す」は取らなくなっていることがわかる。これは V1 である「ほほえむ」が V2 の「返す」の目的語の役割を担っているためと考えるのが自然であろう。つまり、「ほほえむ」の内容が直接内項の位置に埋め込まれた構造をもつことになる。

(29) ほほえみ返す： [x ACT] CAUSE [BECOME [SMILE BE-BACK-TO y]]

このような例は重ね合わせ規則によって扱うことができない。

次に問題となるのは、以下のような語例である。

(30) 持ち帰る, 連れ帰る, 持ち寄る, 持ち去る, 連れ去る, 運び去る, 奪い去る

「持ち帰る」を例にとると、「持つ」「帰る」は概略次のような LCS をもっていると考えられる。

(31) a. 持つ：  $x_i$  CAUSE [BECOME [y BE-WITH  $x_i$ ]]

b. 帰る：  $z_i$  CAUSE [BECOME [ $z_i$  BE-BACK-TO w]]

「持つ」「帰る」の内項は一致しないため、重ね合わせ規則の適用は失敗する。

ここでは、(30) の例がいずれも、V1 と V2 の意味が組み合わせられた結果、V1 の指示対象を移動させるという意味の複合動詞になっていることに注目する必要がある。実際、このような再解釈を許さない「\*食べ帰る」「\*捨て帰る」のような語は存在しない<sup>7</sup>。これを考慮に入れると、「持ち帰る」の LCS は、以下のように与えられる。

(32) 持ち帰る： [x ACT] CAUSE [BECOME [y BE-BACK-TO z]]

---

<sup>7</sup> 「捨て去る」「消し去る」などは一見、反例であるかのように見える。しかし、これらの動詞は動作主がその場から「去る」ことを意味していない。これは、自動詞の「去る」ではなく、現在単独用法としては廃れている他動詞の「避(さ)る」に由来していると考えられる(影山 1993: 136)。

## 5 追加の制約

本節では、重ね合わせ規則に加えて、従来から提案されてきた時間順序・主語一致・対象一致の3つの制約を導入する。

動詞を、働きかけ他動詞、使役変化他動詞、非対格自動詞、非能格自動詞の4種類に分類すると、複合動詞のパターンは全部で16通りあることになる。しかし、実際にはそれらが均等に存在しているわけではない。本節で導入する制約は、重ね合わせ規則と相互作用することにより、複合動詞を形成することが可能な動詞の組み合わせを正しく制限することを論じる。

### 5.1 時間順序

Li (1993: 499) は、中国語、日本語、および動詞連続構文をもつ西アフリカの言語などの対照から、次のような条件を提案している。

#### (33) Temporal Iconicity Condition

動詞の線形順序は、それぞれの動詞が指示するイベントの時間順序を反映する。

ここで、LCS において CAUSE の左辺 (上位事象) が右辺 (下位事象) に時間的に先行していると解釈すると、V2 が V1 に時間的に先行しないという条件から、次が成立することが予測できる。

#### (34) 時間順序の制約

複合動詞の形成において、V1 が下位事象をもつならば、V2 も下位事象をもたなければならない。

これは、もし V1 のみが下位事象をもつとすると、上位事象より時間的に後であるはずの下位事象が先に言及されることになってしまうためである。

3.2 節で示した動詞分類に従えば、下位事象を持たないのは、働きかけ動詞および (非再帰的な) 非能格自動詞である。従って、これらを V2 とし、これら以外を V1 とするような複合動詞は成立しないことが予想される。該当する組み合わせは以下の通りであるが、実際、このような組み合わせをもつ動詞は、ほとんど存在しない。

#### (35) a. 使役変化-働きかけ：\*潰し押す

b. 使役変化-非能格：\*治し喜ぶ

c. 非対格-働きかけ：\*濡れ干す

d. 非対格-非能格：\*負け泣く

## 5.2 主語一致

松本 (1998) は日本語の複合動詞について、V1 と V2 の主語が一致しなければならないという「主語一致の制約」を立てている<sup>8</sup>。

V1 と V2 の主語が一致しない性質をもつ複合動詞は、一定数存在しているが、その大部分は次のような自他交替のプロセスを経て形成されたものと考えることができる。

(36) a. (自動詞 < 他動詞)

- 盛り上がる (< 盛り上げる)
- 積み重なる (< 積み重ねる)
- 煮詰まる (< 煮詰める)

b. (他動詞 < 自動詞)

- 跳ね返す (< 跳ね返る)
- 落ち着ける (< 落ち着く)
- 飛び散らす (< 飛び散る)

自他交替によって作られたと考えることができない語は、次のような例があるものの、極めて限られている。

(37) 譲り受ける, 申し受ける, 死に別れる, 伝え聞く, 漏れ聞く, 泣き濡れる, 寝乱れる, 寝静まる

従ってこれらのケースを例外と見なし、一般的には主語一致の制約が成立することを認めると、「非対格-使役変化」「使役変化-非対格」の組み合わせは成立しないことが帰結する。これは、次のような理由による。次の (38a) を使役変化他動詞, (38b) を非対格自動詞とする。

(38) a. [*x* ACT] CAUSE [BECOME [*y* BE STATE1]]

b. ([*z* ACT] CAUSE) [BECOME [*w* BE STATE2]]

使役変化他動詞の主語は *x*, 非対格自動詞の主語は *w* であるから、主語一致の制約により、*x* と *w* は同一指示である。また、重ね合わせが可能であるためには、*y* と *w* は同一指示でなければならない。従って *x* と *y* も同一指示ということになるが、これは (38a) が他動詞であるということと矛盾する (*x* と *y* が同一指示のとき、(38a) は再

---

<sup>8</sup> 中国語では「打ち殺す」が「打死」と表現されることから分かるように、この制約は通言語的に成立するわけではない。日本語でこのような制約が見られる理由ははっきりしない (由本 2005: 136)。

帰的な非能格自動詞となる<sup>9</sup>)。

従って、主語一致の制約のもとでは、自他交替語を除き、非対格自動詞と使役変化他動詞との組み合わせは成立しない。例えば「殺す」「死ぬ」は形態的な自他交替を示さないので、以下のような組み合わせは存在しないことが予測できる。

- (39) a. 非対格-使役変化：\*おぼれ殺す
- b. 使役変化-非対格：\*刺し死ぬ

### 5.3 対象一致

ある事態がひとつのまとまりを持ったものとして概念化されるためには、動作主の働きかける対象と、その結果として影響を被る対象とが一致することが必要であり、このことが日本語の複合動詞にも表れていることがこれまでも論じられている(影山 1996: 261, 1999: 212)。これを考慮に入れると、複合動詞を形成しやすい組み合わせはさらに制約される。

本稿の立場に立つと、この対象一致の制約は単に次のように述べることができる。

- (40) LCS が上位事象・下位事象の両方をもつならば、 $y$  と  $z$  の指示対象は一致する。  
[ $x$  ACT(-ON  $y_i$ )] CAUSE [BECOME [ $z_i$  BE-AT  $w$ ]]

実際には、本稿では 4.2 節(「洗い落とす」類)と 4.3 節(「飲みつぶれる」類)で、対象一致が成立しないケースを扱っており、この制約は絶対的なものではない。しかし、一致しない場合でも、「洗い落とす」における「服」と「汚れ」の関係からも分かるように、 $y$  と  $z$  のあいだには部分／全体関係などの強い近接性が要求される場合がほとんどであるようである。

この対象一致の制約は、以下の組み合わせによる複合動詞の形成を制限する。

- (41) a. 働きかけ-非対格
- b. 非対格-働きかけ
- c. 非能格-使役変化
- d. 使役変化-非能格

---

<sup>9</sup> 匿名の査読者の方から、他動詞であっても「自分を刺す」のように  $x$  と  $y$  が同一指示になることは可能であるため、直ちに矛盾が生じるとは言えないという旨の指摘を頂いた。本稿では、「自分」のような語の明示によって結果的に他動詞の動作主と対象が一致することはあっても、他動詞の再帰的な解釈が常に要求されるような語形成は避けられると考えたい。しかしながらこれはステイピュレーションにとどまる。

- e. 非対格-非能格
- f. 非能格-非対格

働きかけ他動詞と非対格自動詞の組み合わせを例にとり、これが対象一致の制約によってどのように排除されるかを見ると、以下のようになる。

- (42) a. [x ACT-ON y]  
 b. ([z ACT]) CAUSE [BECOME [w BE STATE]]

働きかけ他動詞 (42a) の主語は  $x$ 、非対格自動詞 (42b) の主語は  $w$  であるから、主語一致の制約により  $x$  と  $w$  は同一指示である。また、対象一致の制約により、 $y$  と  $w$  も一致しなければならない。すると、 $x$  と  $y$  も同一指示ということになり、(42a) は他動詞ではなくなってしまう。従って、働きかけ他動詞と非対格自動詞の組み合わせは成立しない。

#### 5.4 他動性調和の原則について

影山 (1993) は複合動詞において V1 と V2 の他動性<sup>10</sup>が一致しなければならないという「他動性調和の原則」を立てている。

しかし、V1 と V2 の他動性が一致することは、これまでにみた 3 つの制約から導かれる事柄であると考えられる。[±acc] 素性が一致しない組み合わせは次の 6 つであるが、これらはいずれも、これまでにみた 3 つの制約のいずれかに違反している。

- (43) a. 働きかけ [+acc] - 非対格 [-acc] : 対象一致違反  
 b. 使役変化 [+acc] - 非対格 [-acc] : 主語一致違反  
 c. 非能格 [+acc] - 非対格 [-acc] : 対象一致違反  
 d. 非対格 [-acc] - 働きかけ [+acc] : 時間順序違反  
 e. 非対格 [-acc] - 使役変化 [+acc] : 主語一致違反  
 f. 非対格 [-acc] - 非能格 [+acc] : 時間順序・対象一致違反

以上から、これまでに論じた制約に加えて、他動性調和の原則をさらに立てる必要はないと思われる。

<sup>10</sup> ここで他動性とは外項を表出するかどうか ([±acc] 素性) のことを指している。働きかけ他動詞、使役変化他動詞、非能格他動詞はいずれも [+acc] をもち、非対格自動詞のみが [-acc] をもつ。

## 6 おわりに

本稿では、複合動詞の LCS が、それを構成する二つの動詞の LCS から単一の「重ね合わせ」規則によって導き出されると考えることで、複合動詞のふるまいを説明できることを示した。

従来提案されてきた複合動詞の意味表示は、単純動詞と異なる複雑な構造を与えるものであった。これは、複合動詞の形態上の構造と意味表示との対応を優先させたものであると考えられる。しかし、単純動詞であるか複合動詞であるかにかかわらず、両者が同一の統語範疇に属し、文中において同様の意味機能を果たすとすれば、両者に異なった意味表示を与えることは望ましくない。

本稿では、複合動詞が単純動詞と同じ構造の LCS をもつことを前提に置くことで、可能な結合のパターンや、結果生じる複合動詞の性質について説明できるようになることを論じた。本稿の立場では、複合動詞のタイプごとに意味的制約や項同定の規則を立てる必要がない点で、複合動詞の語形成の記述を極めて簡潔にするものとする。

日本語には、今回扱った語彙的複合動詞のほかに、形のうえで一語を成していても、生産的な語形成によって作られる「統語的な」語が存在する。例えば「行かせる」のような生産的な使役形は、使役者による使役と、それを理由として行われる被使役者による移動という2つの能動的行為をひとつの語のなかに詰め込んでおり、今回扱ったような、語彙的複合動詞がもつ意味的制約から自由であることが見て取れる。しかし興味深いのは、仮にこのような語に語彙化が生じるとすれば、それは必ず、単一の語彙がもつことができる意味的な枠に収めるための意味変化を伴うはずだということである。この点で、本稿の視点は、言語変化の問題に関しても示唆するところが大きいと考える。

一方で、本稿には方法論的な問題もある。語彙的複合動詞は、語彙的である以上、日本語の歴史のどこかで成立したものであり、共時的に説明することが必ずしも望ましいとはいえない。本稿では、重ね合わせ規則は、語彙的複合動詞が十分に意味の構成性を保っている場合に成り立つ関係であるとする<sup>11</sup>。しかし、このような立場は反例に対する扱いが恣意的になるおそれがある。データの扱いについてのより一貫した方法論が必要であろう。

---

<sup>11</sup> 例えば「酔っ払う」は V1 が非対格自動詞、V2 が他動詞であり、今回提案した制約からは排除されるはずである。しかし、「酔っ払う」の意味は「酔う」「払う」の意味から構成的に計算できるものとは言えず、本稿の議論に含めるのは適切でない。

## 略号一覧

1sg	.....	1 人称単数	ACC	.....	対格
3sg	.....	3 人称単数	ASP	.....	アスペクト標識

## 参考文献

- 秋山 淳 (1998). 「語彙概念構造と動補複合動詞」. 『中国語学』, **245**, 32–41.
- 伊藤 たかね・杉岡 洋子 (2002). 『語の仕組みと語形成』, 『英語学モノグラフシリーズ』, 16 巻. 研究社.
- 影山 太郎 (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- 影山 太郎 (1996). 『動詞意味論 —言語と認知の接点—』, 『日英語対照研究シリーズ』, 5 巻. くろしお出版.
- 影山 太郎 (1999). 『形態論と意味』. 日英語対照による英語学演習シリーズ. くろしお出版.
- 影山 太郎 (2002). 「非対格構造の他動詞」. 伊藤 たかね (編), 『文法理論: レキシコンと統語』, pp. 119–145. 東京大学出版会.
- 影山 太郎・由本 陽子 (1997). 『語形成と概念構造』, 『日英語比較選書』, 18 巻. 研究社.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar. Volume 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Li, Y. (1993). Structural head and aspectuality. *Language*, **69**, 480–504.
- 松本 曜 (1998). 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」. 『言語研究』, **114**, 37–83.
- 鈴木 武生 (2004). 「中国語結果構文の派生とアスペクト特性」. 『日本言語学会第 129 回大会予稿集』, pp. 315–320.
- 由本 陽子 (1996). 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」. 『言語と文化の諸相 —奥田博之教授退官記念論文集—』, pp. 105–118. 英宝社.
- 由本 陽子 (2001). 「動詞から動詞を形成する語形成における下位範疇化素性の受け継ぎについて」. 『言語文化研究』, 453–473.
- 由本 陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』. ひつじ書房.



# Japanese compound verbs as superimpositions of meaning

Yoshihiko ASAO

## abstract

This paper deals with the formation of Japanese compound verbs and claims that possible combination of verbs, as well as their argument structures, can be predicted by assuming the mechanism of superimposition of meaning.

It has been pointed out that lexical verbs in natural languages, whether simplex or complex, are subject to inherent semantic constraints, which can be captured by the following schema in the framework of Lexical Conceptual Structure (LCS):

- (i) [x ACT(-ON y)] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

In previous studies, however, it has been often assumed that the LCSs of compound verbs have more complex structures, in which the LCSs of their constituent verbs are combined with additional predicates such as BY and WHILE.

This paper takes another approach. It is assumed that every compound verb strictly follows the structure shown in (i), and its content is obtained by superimposing the LCSs of the two constituent verbs. It is shown that this assumption accords well with basic properties of Japanese compound verbs, and some of their peculiar behaviors can also be seen as direct consequences of the assumption.

This paper further argues that possible combinations of verbs can be properly constrained by taking into account three additional constraints: the temporal iconicity condition, the subject identity, and the theme identity. The transitivity identity condition, another constraint proposed in the literature, automatically follows from the conditions proposed in this paper.